特255
340

養生訓
性本義
本義
義（合巻）

原鴻太郎著

富士の高峯の雪白く。
こゝを如何にとたづぬれば。
神の知らする皇國。
世界にならぶ者やある。
我等も神の末なるぞ。
いざ諸共に禊して。
雪より潔く海よりも。
國の光をます鏡。
神の末とはいはれまじ。

蓬萊島の水玄し。
神の擇びし中津國、
神の守れる美し國。
土地勝るれば人勝る。
我等も神の末なるぞ。
心の汚れさつぱりと。
深き道理を推し究め。
世界の闇を照さずば。
神の御子とはいはれまじ。

特255
340

皇訓養性義

本本義

（合卷）

著者寄贈本

皇訓本義

岸原鴻太郎

今回兩議院に於て思想及教育の根本的革新が議決せられ、政府も之に贊同の意を表せられしのみならず、曩くも其後（昭和八年三月廿七日）を以て詔書を渙發せられ、「臣民各正ヲ履ミ中ヲ執リ協翼遒往以テ此ノ世局ニ處シ進テ　皇祖考ノ聖猷ヲ翼成セヨ」と勅し給ひぬ。旁以て正の義、中の義乃至教育及思想の根本義を天下に明にする必要に迫られたり。不肖淺學寡聞と雖も默止す可き秋に非らざるを以て、敢て卑見を述べて諸賢の斧正を乞ふ可し。

○按に正と謂ひ、中と謂ひ、根本義と謂ふも、其歸や一也。即ち其一なる者は教育勅語の所謂「斯ノ道ハ實ニ我ガ　皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守ス可キ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラズ之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ朕爾臣民ト倶ニ拳拳服膺シテ咸其德ヲ一ニセン コトヲ庶幾フ」とある數句に出です。是れ實に天上天下唯だ一の大道なれば也。若し此の外に法規や科學や技術など在りと言ふ

者あらば（某氏の如く）そは全く無學門外の人と謂ふ可し。（後文熊澤蕃山の說を見よ）

○次は「之を古今に通じて謬らず中外に施して悖らさる」皇祖皇宗の遺訓とは如何んと云ふに今回の詔書に示されたる中字がそれで、天の御中主の神なる至靈であり、至理である。個人に於ては之を良知と云ひ、或は靈智と稱する者で、其中を執て失はざれば神聖と爲り、之を失へば凡愚と爲る。故に堯曰。尤に其中を執れ。舜曰、人心惟れ危く、道心惟れ微也、惟れ精に、惟れ一に、尤に其中を執れと。禹曰、偏無く黨無く、王道蕩蕩たり、黨無く、偏無く、王道平平たり、反無く側無く王道正直なりと。是れ正に詔書中正の出所なる可し。又中庸に曰中は天下の大本なり、和は天下の達道也、中和を致して四時行れ萬物育はると。是れ正に古今に通じて謬らず、中外に施して悖らさる所以也。之を日用事に見るも皆然り。彼の自轉車の如きすら其中心を失はざれば運轉自由自在なり。苟も其中心を失へば、忽ち顚覆す。其人心に於るも亦何ぞ之に異ならんや。故に舜は惟れ精に、惟れ一に、即ち精一、專精の努力を以て中を執れと云へり。釋迦は之を萬人と一人と鬪ふが如く努力せよと示し、孔子は死を守て道を善くすと云ひ、陽明は猫の鼠を捕ふるが如く、雞の卵を覆ふが如く、精神心思凝聚融結して復た其他あるを知らされと敎へたり。釋迦は之れが爲めに六年山に入り、達磨は之れが爲めに九年面壁せり。此れから見れば現代學の如きは全く以て兒戲なり。一番寒氣、骨に徹するにあらずんば、爭でか梅花、鼻を撲つの香を得ん。現代學生の無氣無力放漫墮落は當然也。大丈夫の道に志すや、去聖の爲めに絕學を繼ぎ、來世の爲めに太平を開くの雄圖無る可からず。豈に私利黨欲の奴隷に甘じて可ならんや。先以て我が心中の賊を破るを要す。之を爲すには坐禪や敬神が最も效あり。釋迦曰、人禪那を學ばざれば智慧有ること無しと。又曰、離欲寂靜を最上の法と爲すと。

○三種の神器も亦如上中道不偏の表象也。即ち神鏡は天の御中主の神にして、神劍は伊邪那岐尊に當り、神璽は伊邪那美尊に當る。又之を天道より見れば、神鏡は易の太極に當り、神劍は易の陽に當り、神璽は易の陰に當る。世儒之を智仁勇の表象と云ふも、下文を見て其誤なるを知る可し。

○以下陰陽太極の概要を舉ぐ可し。陰陽太極の要を自轉車に譬へて言へば、左右の兩輪は陰と陽にして、中心を執る所の軸が太極である。只だ是れ丈で自由自在に運轉する。一番大切なるが中心を執る所の大極である。之を時計に觀、之を人の步行に觀、之を鳥の兩翼と尾等に觀よ。天地間の事物陰陽太極の理に由らさる者莫し。故に

○素問に「黃帝曰、陰陽なる者は天地の道也、萬物の綱紀、變化の父母、生殺の本始、神明の府也」と。此れ古今に通じて謬らず、中外に施して悖らさる所以の原理也。

○同書に「鬼臾區曰、物の生する之を化と謂ひ、物の窮る之を變と謂ひ陰陽測られざる之を神と謂ふ。神の用たるや方無し、之を聖と謂ふ」と。此れ東洋神聖の不可思議尊嚴、自由自在、遊戲神通を有する所以也。

○孔子曰、一陰一陽之を道と謂ふ、之に繼ぐ者は善也、（大學の至善）之を成す者は性也、（中庸の所謂天の命ずる之を性と謂ふ）仁者は之を見て之を仁と謂ひ、智者は之を見て之を智と謂ふ、百姓は日に用て知らず、故に君子の道鮮し」と。道は廣大無邊の者にして、仁や智の如き者でないのを、仁者は仁と思ひ、智者は智と思ふから、君子の道鮮しと云へる也。以て三種の神器を智仁勇の表象とする學者の誤りを知る可し。又老子は「大道廢れて仁義有り」とさへ云へり。

○又孔子は易に於て「易に太極有りて兩儀を生じ、兩儀、四象を生じ、四象、八卦を生じ、八卦、吉凶を定め、吉凶、大業を生ず」と云へり。又曰、易の道たるや變動して居らず、六虛に周流して上下常なく、剛柔相易りて典要と爲す可からず、唯だ變の適く所のままにすと。恰も風の方向を定めざるに似たり。是れ前文に、神の用たる方無し、之を聖と謂へるに同し、世儒は以爲らく、道は一定不變の者なりと。其一定不變たるや、陰陽太極の三者こそ萬古不易なれ。其陰陽の變化に至りては、神變不可思議なり。故に右の如く云へり。尙ほ次を見よ。

○老子曰、道の道とす可きは常道に非ず、名の名とす可きは常名に非ず、無名は天地の始也、有名は萬物の母也、故に常に無欲にして其妙を觀る、常に有欲にして其徼を觀る」と徼は物の終局也。事の行き詰り也。現代物質文明の行き詰り是れ也。有欲の爲め也。有欲なれば偏する所あり。故に圓轉する能はずして其道窮る也。之に反して無欲なれば中心を失はざるを以て、滑達し、其妙を觀る也、故に道を道として道に偏すれば道を失ふ。此の故に道の道とす可き者無し。止た無心なれば道に合す。現代教育者之を知らずして道を守らしむ。故に道を失ふ。尙ほ次を見よ。

○老子曰、學を爲せば日に益す、（知識を增益す）道を爲せば日に損す（知識を滅損す）日に之を損し、又日に之を損して無爲（無心）に至れば爲さざる所無しと。是れ孔子の「思ふこと無く、爲すこと無く、寂然不動にして、感じて天下の故に通ず」と云へると同一理也。又釋尊は四十二章經に於て「欲を斷ち、愛を去りて、自心の源を識り、無爲の法を悟り、所得、所求の心無き、之を名て道と云ふ」と示せり。されば道なる者は我に在て外に求む可き者にあらず。故に明教大師の如き、心之を道と云ふと示せり。釋尊又曰、心垢盡くれば未だ天地あらざる昔時より今日に至るまでの十方の所有諸物、見ざる無く、知らざる無く、一切智を得る之を最明と爲す」と。要するに道は求む可き者にあらず。止だ無念無想無爲無欲にして始て心垢去り解脫悟道して之を體得

す。之を眞道と云ひ、眞學と云ふ。宜しく前項と參照し會得す可し。

○又賀茂眞淵大人は「日本は言擧せぬ國で、元來道なぞと云ふ者は無く、人情の自然に出で、君を敬し神を信ずるが人情の自然である」と示せり。誠に得難き金言である。心即ち道であるのに、心を舍て、道を外に求るが故に、學べば學ぶほど惡知識を增益して、良知良能の出現路を遮蔽し、爲めに狂愚と爲り、暗昏と爲り、遂に今日の思想國難を來せり。其罪全く教育家の無學に在り。是の如き教育は一日も速に撲滅せざる可からず。尙ほ道を心外に求むるの大間違なることを左に立證す。

○孟子曰、人の學びずして能くする所の者は其良能也、慮らずして知る所の者は其良知也。

○孔子曰、天下何をか思ひ何をか慮らん、一致して百慮也、（悟道は百慮に價す）天下何をか思ひ何をか慮らん。

○明教大師曰、妙心は修行して成る者に非ず、本より成れる者也。

○基督曰、麹酵の如く內より勃興す。

○達磨曰、心墻壁の如くして道に入る可し。

○道元禪師曰、正學は打坐のみ。

○山岡鐵舟曰、擊劍の極意は一切思案分別を打捨て、敵の太刀を振り擧るを見るや直に付け入る可し。

○大醫德本曰、診察は無念無想なる可し。

○六祖大師は明上座に「不思善、不思惡なれ」と教へたり。是れ皆心の中心を失はざれば心波起らずして一切智を得るが故也。大學の至善も亦結局不思善、不思惡に歸す。無念無想是れ也。孔子曰、人皆予を知なりと曰ふ、中庸を擇びて期月を守る能はずと。守らんと擬する心あるが故に、之を失ふなり。故に中庸を得んと欲せば無念ならざる可からず。無念なれば偏する所無し。故に之を失はず。之を　皇訓に見れば左の如し。

○天の御中主の神は即ち混然たる太極にして、善惡、是非、淸濁、淨穢等一切の二邊を超越し、抱容して、之を統御し給ふ。吾人の心も亦斯の如くならざる可からず。是れ卽ち堯舜禹の執中であり、孔門の至善中庸である。

○伊邪那岐の尊は日向の小門の阿波岐が原にて一切の所有を捨て去り赤裸々の御身となり給ひて、心身の汚れを洗ひ淸められしかば、其結果とし　天照大御神が出現し給へり。是れ心垢盡くれば一切智を得る實教である。又伊邪二柱の神が交り給ふ時に、女神が先づ言擧せられしより蛭子が生れ

給ひしとの事は大切な教訓である。此れが陰陽の尊卑先後である。

○天照大御神は天孫邇邇藝の命に、此の鏡は專ら我が御魂として吾が前に齋が如く齋つき奉れと勅りて神鏡を授け給ひき。抑も齋くとは齋戒沐浴との熟語ある如く、雜念を去りて無念無想、不思善不思惡にして赤子の心に復るを云ふ。齋は齊なり。心を均くして思ひ邪無きを謂ふ。日本書紀に「神功皇后吉日を選びて齋宮に入り、親から神主と爲りて神託を乞はれし」とあり。又禮記に、君子の祭りは齋すること三日、必ず其祭る所の者を見る、誠の至り也とある。されば天孫の大御神又は神鏡に對する齋きも前記の如くなりし者と思はる。此の齋即ち心垢を去るの道にして、神前や神器に對して爲すが故に、座禪や靜坐に比すれば更に嚴肅有效なること明なり。是れ吾人が大に學ばざる可からざる所也。

○高島易斷の序に云ふ、神武天皇都を橿原に建て、國事を圖らせ給ひし當初より　天皇親から島見山の祭壇に臨み給ひて親しく神に接し、神意を得て當世の國是を定め給ひて、之を民に施し給ふ、故に神に事へるを祭りと謂ひ、民に施すを祭り事卽ち政と謂ふ、天皇の神聖にまし〳〵てすら猶ほ國政を獨斷し給はずして、神意のまに〳〵施し給ふ故に隨神の道と稱す、是れより以後國の大事は必ず至誠を以て神意を伺ひ、神託又は神占を受けて實施し給ふを常典と定められたり」とある。是れ吾人が神に對し君に對し父母に對して大に學ばざる可からざる大皇訓にあらずや。

○以上述る所の皇訓たる眞に易簡にして何等の學問を要せず。止だ神に對し長上に對して心の誠を盡すのみなれば、如何なる愚夫愚婦でも容易に之を修め得る無類最上の法である。殊に大切なのは神託又は神占を受け神政を行ふことである。斯くすれば政教ともに民信じて之に背く者無く絕對無上の政教と爲りて、黨害など起るやうのこと無く、億兆一心に歸し、咸共德を一にすることが出來る。實に日本には是のの如き有難き神道あるに、外來の儒佛や洋夷の物質形而下の思想に昏醉して種々の國難を將來せしは如何にも智慧のない、淺間敷ことで、丸で話にならぬ。唯々其狂愚に驚く外は無い。我輩が斯く書きても尙ほ覺醒せぬ人があらば、我等は之を人非人と呼ぶか、又は國賊と云はん。

○以下德富蘇峰子の近世日本國民史に出て居る思想篇中の一二節を借用し、其大意を譯出し、當局又は一般學者に共全篇の閱讀を勸む。同篇には、熊澤蕃山、山鹿素行、山崎闇齋、其他諸先輩の神道及び皇國土の論說が載せてある。

○蘇峰子曰、蕃山は切支丹にあらず、佛にあらず儒にあらず、神道を以て日本の敎と爲す可き者とした、そは神道が日本固有の道にして日本の水土に適應するからである、此れは彼一人の思想でな

く。其時代共通の思想であつたらしい、保科正之、徳川義直、徳川光圀、山崎闇齋山鹿素行、林道春の如きさへ神道を尊崇した。

而して其中にも蕃山は其水土論の立場よりして神儒佛三教の併取でなく、只神道のみ取る可しとした、そは儒教は支那の水土に適する者にして日本に其儘行ふ可からず、佛教は儒教に比すれば聊か日本の水土に適しゐたるも、今日は繁雑贅澤となつた、故に今日は只易簡質朴なる神道のみであるとの意味だ。

○蕃山は云へり。釋迦は聰明の人なれば、若し日本に渡らせ候はゞ茫然として新に生れたる如く、後生輪回の兒も何も忘れらる可く候、若し唐土に渡られ候はゞ聖人を師とし、日本ならば神道に從はる可く候。

又曰、中夏(支那)の聖人を日本に渡し候はゞ、儒道と云ふ名も聖學と云ふ語も仰せられまじく候、其ままに日本の神道を崇め、王法を尊びて廢れたる神道をかへされ(恢復)申すべく候。

○蘇峰子曰、彼れは神道に就ては左の如く云へり。

夫れ三極備りて後ち智仁勇の德あらはる、上古は名なくして德行はる、あつき(淳朴)の至りなり、後世に及びては教へなきこと能はず、故に其時の聖人是に名付て教へとす、唐土の聖人は是を智仁勇の三德と云ふ、日本の神人は是を三種の神器に象る也、(是をの字は三極を指す注意)神璽、寶劍、內侍所の象を作て心の三德を知らしむ、至易至簡にして、道德學術の淵源也、高明、廣大、深遠、神妙、幽玄、悠久、悉く備れり心法政敎、他に求めずして足る。

筆者云、三極とは易の繫辭の語也。朱子の註に曰、三極は天地人の至理也、三才各一太極也と。然らば上文「三極備りて後ち智仁勇あらはる」とは、天地人三才の陰陽太極が完備して始て智仁勇の德が現出すとの義也。然らば太極が本にして智仁勇は末也。故を以て太極が無ければ智仁勇は成立せず。若し之れありとするも、其智仁勇は邪智婦仁暴勇のみと知る可し。蓋し蕃山子が智仁勇の文字を使用せしは、當時儒家に智仁勇の說盛なりしかば、人の知り易き爲め假り來て之を用ひし者也。共證據は「三極備りて後ち智仁勇あらはる」との條件附にて之を用ひしこと、及び「道德學術の淵源、高明廣大、深遠神妙、幽玄悠久、悉く備り、心法政敎他に求めずして足る」の文字が智仁勇に對しては過分なるにて明白也。之を前文孔子の仁者は之を見て之を仁と謂ひ智者は之を見て之を智と謂ふ、故に君子の道鮮しの語に顧み、又老子の大道廢て仁義ありの言に照せば、益〻其然るを知る。我邦が斯く辨難する所以の者は、仁義禮智信など云ふことは、日本神道の易簡淳朴なる美風を破壞し、人を小巧僞善に誘致する弊あるを以て也。眞淵子は前文に「日本には道なぞと云ふ者も無

く人情の自然のみ」と云へるにても知る可し。兎角後世の儒者は小刀細工を爲して人の性を桎梏し、混然たる太極の心を失はしめ、是非善惡の觀念を極度に伸長せしめて、人和を破るの結果は、罪人をして悔い改むる餘地も無く、遂に累犯を餘儀なくせしむるに至る一事を以ても知る可し。

蕃山曰、文字の如きは唐土の者を借るも可也、只だ貸すこと能はざる者あり、日本の水土山る神道は他國に貸すこと能はず、借ること能はず、(外國人が)唐土の水土に由はる聖教も又日本に借ること能はず、佛教も亦然り。(眞に卓見)文字器物理學貸す可し借る可し、學は儒佛も學び須ゆたかに(豊)心廣くなりて貸借せざる吾が神道を立つ可し。(和魂漢才の謂)

又曰、學に借る可き儒道を借らずして治道に借るまじき儒佛の法を借りしは不可なり、故に日本人が至治の澤を蒙らざる事久し、神道の正心、修身齊家治國平天下の川を兼て一人立(獨立)する事能はざるは、全く儒を借らざる故也、佛者は儒を借りて盛になりたり、神道者の借る可くして借らざりしは其の過ち也。

筆者曰、醫者の藥袋中には萬邦の藥石を貯ふ可し。然れども治方は土地に依り人に依り老壯男女に由りて異なり。之を回病異治と云ふ。若し支那人印度人に用て效ある劑でも、之を直ちに日本人に用れば害となることあり。上文の理之に同じ。要は取捨に在り。然るに神道者が其藥を集め貯ふることをせざるは甚だ非なり。今も昔しも此の怠慢は許し難し。況んや今日神道を以て國家を救濟せんとする際なるをや。次に日本が世界の最上土なることは、不肖が昭和六年大日誌に載せし皇訓實行論、及び近著神道神武興國論に證明せし所也。日蓮上人の如き「日本は萬國に超越せし國にして又神の守らせ給ふ純大乘の國」と云へり。實に共通り、神道は世界一の純大乘也。其純大乘の國に生れて、純大乘の何物たるを知らず、外國の小乘や物質學を此の上無き者と思ふは神に背くの甚しき者也。

○次は思想篇中山崎闇齋の事なり。右に由れば、闇齋は始め保科正之の臣服部安休等と陰陽太極の研究を爲せし者の如し。而て其後闇齋の記せし伊勢太神宮儀式の序には左の如く云へり。

夫れ神の神たるや、其初め此の名、此の字有らざる也、其れ惟だ妙にして測られざる者を陰陽太極の主と爲す、而て萬物萬化之に由て出でざる莫き也、日本紀に所謂國常立尊なる者は、乃ち尊で之を號け奉る也と。

筆者云、是れ卽ち天の御中主の神にして、陰陽五行の主宰者を指す也。其主宰の狀を考るに、黃帝の素問に「上古に眞人あり、天地を提挈し、陰陽を把握す、其壽天地を盡すも終らず」とあり。

又如何にして天地を提挈し、陰陽を把握せしやと云ふことは、拙著神道神武興國論中詳記せる。感應力也と知る可し。

結論

一、上文に由れば教育の根本義は　皇祖皇宗前記の御神業と三種の神器を以て示されたる三德也。

一、而て其三德は陰陽太極たること明白也。之を最も明白に言ひ顯したる者は、黃帝の所謂「陰陽なる者は天地の道也、萬物の綱紀、變化の父母、生殺の本始、神明の府也」である。次は堯舜の執中、大禹の不偏不黨正直、次は孔門の中庸と至善、次は老子の「天下始有り以て天下の母と爲る、既に母を得て以て其子を知る、既に其子を知て復た其母を守れば身を沒するまで殆からず」と云へる語也。是れ陰陽を子とし、太極を母とせる者にして、其母たる太極を守て之を失はざるを最も大切と爲す也。

一、其太極を守て失はざる法は無念無想にあり。孔子が「中庸を擇びては期月も守る能はず」と云ひしは上文に載する所也。意念を胸中に存しては到底中庸を得ること能はず。孔子が適無く莫無くと云ひしも是れ也。思邪無しと云ひしも是れ也。思ふこと無く爲すこと無く寂然不動にして感じて天下の故に通ずと云ひしも是れ也。回や屢〻空しと云ひしも是れ也。意毋く我毋くと云ひしも是れ也。其他諸賢の言は上文に詳也。故に現代の如く理想とか思想の自由とか云ふ誤解がありては、徹頭徹尾悟門を開く能はず。千生萬生煩惱鬼たるを免れず。現時の知識階級を見るに、其智適に農夫野人に劣り、寸前闇黑なり。是れ思案分別に耽るが爲めの好證也。何も思はざれば天地と同じ。天地と同じければ天地と同く中を得て靈明也。

一、陰陽太極の詳義及作用は素問に在り。

皇訓本義追補

不肖が皇訓本義を草する事、早卒に出で意に滿たざる者あり今玆に其追補を爲す可し。

○蘇峰子思想篇に載する德川家康の那蘇教禁止文曰「夫れ日本は神國也陰陽測られざる之を名て神と謂ふ、人の生を得る悉く神の感ずる所也云々」又豊臣秀吉の印度副王に與へたる書に「曰夫れ吾國は神國也神なる者は心也、森羅萬象一心を出でず陰陽測られざる之を神と謂ふ故に神を以て萬物の根原と爲す云々」と此の陰陽測られざる之を神と謂ふ語は易の繫辭にも出で居るが其本源は黃帝素問に「五運陰陽なる者は天地の道也萬物の綱紀、變化の父母、生殺の本始、神明の府也故に物の

生ずる之を化と謂ひ物の極る之を變と謂ひ陰陽測られざる之を神と謂ふ神の用たる方無し之を聖と謂ふ、夫れ變化の用たるや天に在ては玄と爲り人に在ては道と爲り地に在ては化と爲る。化は五味を生じ道は智を生じ玄は神を生ず」とある此の故に玄（高遠玄微）に非らざれば神を生せず、道に由らざれば智を生ぜず化に非らざれば五味を生ぜず而も此の天地人三才を兼て之を完具する者は人なり人なる者は天地の靈氣也故に禮記に曰人は天地萬物の心也心なる者は天地萬物の主也」と此の心即ち天の御中主神にして亦吾人が天賦の良知なり之を指して上文に「神なる者は心也森羅萬象一心に出でず」と云へり又「陰陽測られざる之を神と謂ふ神の用たる方無し之を聖と謂ふ」とは心の外には方も無く道も無い天地の靈氣即ち陰陽太極にして陰陽太極即ち心であることを示したる者である、要するに心の外には何物も無いのである道など云ふ者は假の名である道すら假の名であるから、仁義禮智信の五常など云ふ者も無論假の名で實質は陰陽太極の分子たる五行である仁は春の異名、義は秋の異名、禮は夏の異名、智は冬の異名、信は四季の土用である、圖翼に曰五常の德たる木德を仁と爲し金德を義と爲し火德を禮と爲し水德を智と爲し土德を信と爲す仁或は柔に失す故に義以て之を斷んず、義或は剛に失す故に禮を以て之を節す、禮或は拘に失す、故に智以て之を通ず、智或は詐に失す、故に信以て之を正す是れ五行生尅反用の道也」と即ち四時と土用の五者相依りて年を成し萬物を生成收藏する者たるに過ぎず、故に仁に拘はれ義に捉はれ勇に捉はるれば、天地の運行に反し陰陽變化無方の聖道に反す之を要するに心の外には道は無ひのである此の事は皇訓本義にも縷說したれども大切の事だから更に申述ぶれば王陽明曰天下心外の事無く、心外の物無し、萬事萬物の理は吾が心に外ならず○佛書に曰心外無別法○首楞嚴經曰山河虛空大地皆此れ眞心中の物也、世人は心を身內の者と思ひ迷へり○黃檗曰虛空是れ我が心體也○大鹽中齋曰身外の虛は即ち吾心の本體也○臨濟曰心は十方に通貫すと之を要するに一切諸物の心は宇宙に充滿する陰陽の一氣で　皇祖御中主と同靈であるが故に神を信ずれば共信の度に應じて心が無欲清淨となり共清淨の度に隨て賢と爲り聖と爲り神と爲ること、月の清水濁水に共影を印するに明暗の差別あるが如し、兎にも角にも一心に神を信じて心の垢れ身の汚れ行の偏倚を去りて無欲無心の境に安住し、決して道を心外に求む可からず、心外に道を求むれば心、道に偏するが故に我が心の眞道を失ふ、故に古人云ふ眞忠は忠を忘れ眞孝は孝を忘ると無心にして赤子の心に復すれば一切智を得て自由自在の神通を得る之を惟神道と云ふ也終りに一言す上文本義中審山の語に悠久と云ふ文字を見た其出所は易の繫辭第一章で宰相の在職は悠久ならざれば風化も起らず功業も成らぬ道理が說てある政黨內閣など云ふ無責任、跡は野となれ山となれ的で某錢道大臣被告事件

の如き吾等國民を侮辱し魚肉視する甚しき者ではならぬ、是を以て是非本義に遡べし如く神勅政治を復興し、宰相も神勅又は神占を以て定めたき者である小人の非望を斷ぜされば國家の安泰は期す可からず。

養性本義

立志　養性定義

岸原鴻太郎

○養性とは天に禀け得たる素質を失はぬやうに保持するを云ふ（附け加ふるに非ず）中庸に「天の命する之を性と謂ふ、性に率ふ之を道と謂ふ、道を修る之を敎と謂ふ」とある。此の故に、敎育勅語の通り　皇祖皇宗の遺訓に隨ふことが卽ち養性の本義である是れ皇訓本義と合卷にして世に出す譯である、肉體は精神次第の者で如何やうとも爲る者だから、精神の修養さへ出來れば、無病長壽疑ひ無しである、世間の藥食に由る養生は枝葉末節である。

○精神を修養し無病長壽を得んと欲せば、先づ大志を立つ可きである、養性に限らず何事を爲すにも、不レ撓不レ屈の精神氣魄が無くてはならぬ、然らされば、世の惡習に染みて、中途にて墮落し、一生を謬る者が多い、譬へば舵無き船の如き者で、到底目的の處に到ることが出來ぬ、吾等の青年時代では、少年にして女に交る者あれば、柔弱ものと賤み、絶交して仲間外しを致した者だ、それ

だから肺結核など病む者は、更に無かつた、然るに明治の央より、漸次に風俗が亂れ、今日では世界一の肺病國となつた、其他青壯年の病者が多きは、全く大志なきの致す所である、大人にしても僅か五六十になれば、老衰し死亡する者が多い、畢竟大志なく大智なきが爲めに、來世のあることを知らず、死後に靈魂の存在するを知らず、共靈魂が復た此の世に生れ出るを知らぬからである、老子經に「死して亡びざる者は壽し」とあり禮記に孔子の前同一の說あり又易經に「死生は晝夜の如し」とあつて人生は朝に覺めて、夕に眠り夕に死して、朝に復た生れ出るとあるは知らずして來世の說は佛者の詭辯などゝ思ふ人がある、實に淺間しき無智で沙汰の限りである、吾等が養生の目的は菩薩と成る爲めなので僅か五七十年間の爲めにする養生では無い、死して亡びず老子の如く千三百遍、釋迦の如く八千遍も、生れ代りて神聖佛陀と成る爲めの養性である、夫れ故に大志を立ててねばならぬ、王陽明曰夫れ學は立志より先きなるは莫し、志の立たざるは猶ほ共根を植ゑずして培養するが如し、世の墮落して惡に習ひ、汚に染むは、志の立ざる故なり又曰夫れ志は氣の帥なり人の命也、木の根也、水の源也、源深からざれば流息む、根植へざれば木枯る、命續されば人死す、志立されば氣昏し、是を以て君子の學は時と無く、處と無く、立志を以て事とす、猫の鼠を捕るが如く、雞の卵を覆ふが如く、精神心思凝聚融結して復た他の念無し然して後ち此の志常に立ち、神氣

精明に、義理照著にして、私欲有れば便ち知覺し、自然に容住するを得ず、故に一毫の私欲萌すとき、只此の志の立ざるを責れば、即ち客氣（邪念）消除す、或は怠心出ず、此の志を責れば即ち怠らず忽心生ず、此の志を責れば即ち忽せず、躁心生ず此の志を責れば即ち躁せず、妬心生ず、此の志を責れば即ち妬せず、傲心生ず、此の志を責れば即ち傲せず、吝心生ず、此の志を責れば即ち吝せず、蓋し一息として、志を立て、志を責る時に非らざる無く、一事として志を立て志を責る地に非らざる無し、故に志を責るの功、其人欲を去るに於て、烈火の毛を燎き太陽一たび出でゝ怪物の退散するが如し」と是れ邪心を去て無心となし心の中正を得て德を樹ると同時に氣血の運行正しくして無病長生に至らしむる完全無缺の養性法と知る可し。

○抱朴子に曰鶴は千年龜は萬年、虎鹿兎は各千歲、百歲にして一年中の吉凶及び千里外の事を知る」と然るに人は萬物の靈長にして何故短命なるや、又何故明日の事すら知らず、一里さきの事すら識らざるや、思ふに動物は飢れば食を求むれども、腹に充つれば直ちに食を忘る、又貯蓄の念無し時來れば交尾すれども、時去れば復た食ひ、大醉すれども興に乘ずれば復た飲む、或は醉て女に交るが故に、精液多量に泄れ、

翌日大に疲れを覺ゆれども、其の何に由て然るやと云ふことすら知らず、又金有る者は數婦を養ふて其精を竭くし、美食に飽きて胃を傷り、或は温衣して皮膚を弱む、其甚しきは財を積むことを知て、世用を爲し或は人を救ふことを知らず、慾の一邊に傾倒するが故に氣血も又一方に偏倚して、順環するを得ず、是を以て常に病み、常に苦み、憂愁して早死す、何ぞ其無智の甚しきや、張仲景が傷寒論の序に曰當世の士、心を醫事に留めて、其身を長養するを知らず、只だ名利を競ひて、其末を飾りて其本を棄て、其外を華にして、其内を悴す、皮存せずして、毛何ぞ附かん、卒然風邪に遭ひ、非常の疾にかゝりて、震慄して凡醫に掛り、身斃れ神滅して、饑鬼道に落ちて、異物と爲る、斯くも輕き命ならば、何の爲めに榮華を求めしや、進んで人を愛する能はず、退て身を愛する能はず、朦昧惷愚、遊魂に似たり哀哉俗士、浮華に馳せて根本を固くせず、身を忘れて物に役せらる」と現代の人士更に是れより甚し育腸炎膀尿病子宮病等に罹り手術して死する者項背相望むも更に前車の覆るを知らず、何ぞ其無智の甚しきや其他は推して知る可し、此の故に　皇訓を奉じて人欲を去り其惑を解きて天然の良知を復せさる可からず原坦山師は「世人、病の惑より來るを知らず怠惰、放恣、思念、皆病本也とて、惑病同原論を著せり○大涅槃經に曰病の因緣は苦惱、憂愁悲啼心身の不安なり」と何か故に然るやと云ふに○黄帝素問に曰「怒れば氣上りて、氣血の行早く、喜べば氣緩りて、氣血の行遲く、悲めば氣消へて通ぜず、恐れば精却く、憂れば氣亂れて精神定らず思へば氣結りて行かず」と又何の爲めに喜怒悲憂恐を起すやと云ふに、天理に闇きが故也、何が故に闇きやと云ふに、慾の爲め心に垢付く故也、其垢なる者は何物なるやと云ふに、心が中心を失ふて一方に偏するが故也、是を以て　天の御中主の訓に從て中心に復せさる可からず、其中心に復したるを無心と云ひ、中庸と云ひ、至善と云ひ、執中と云ひ、良知良能と云ふなり、故に○黄帝素問に古聖人民に教へて曰

恬淡虚無なれば（無心安靜）眞氣之に從ひ精神、内を守れば何の病か來らん、是を以て志閑にして欲少く、心安くして物に懼れず、形ち苦勞して倦まず、神と形ちと順從して、各其欲するに從て、皆願ふ所を得る、故に善惡の食物皆美く、美惡の衣服皆體に適し、高下相慕はず（其分に安んじて相羨ず）是を以て嗜欲の其日を勞するに足る者無く、淫邪の其心を惑はすに足る者無し故に愚智も、賢不肖も物に懼れず、故に年皆百歳以上にして動作衰へず、然るに今時の人は酒に溺れ色に耽りて、其精を竭し、其眞を散し、其心を快にして養生の方に逆ふ（樂み極れば悲生ず）故に五十歳にして衰ふ（以上意譯）

○櫻寧室養性訣曰人の養性に五つの難事あり其一は名聞利慾の去り難きこと、其二は喜怒の情其度

に超る事、其三は好色の心深き事、其四は滋味の口に絶へ間無き事、其五は一切の事の心に懸りて忘れ難き事なり、若し人此の五つの者を胸裡に蘊る時は、如何なる養性の術を行ふも、決して其功無く、必ず病苦を招き、中道にて夭するか、偶々老境に到るとも、心身共に衰へて、用に立ち難し、養性の道とて、別に秘訣あるに非ず、只だ人と生れ得たる天性を遂る事なれば必ず外に向て來ること勿れ、先づ士なれば武藝を嗜み、其身を愛し、只義の爲めには命を塵より輕んずる念を長ずるが、養性の第一也、農ならば國主の恩を忘れず、稼業を懈らざるが養生なり、其他工匠の其職に拙からず、商賈の非義の利を貪らざるが如き、是れ工商の養性なり、其故如何となれば、四民各々其分限を知り、謙虚を守り、内に省て聊かも愧ることなければ、精神自ら爽快に、氣血融通して、病を生ずる資本なし、論語に思ひ邪無しと云へり、邪無ければ其心必ず爽快也、爽快なれば病自ら少し、今養生の道を一言に約すれば、此の思ひ邪無しの一語に盡く、又曰一切の病苦は皆其心の偏倚より發することを能く反求すれば之を治るの法も自ら明め得らる今養性の第一義とする者は只其慾を忍ぶに在り」と筆者云ふ人の物慾を離れ得ざるも職業に上下あり、尊卑ありと思ふも、其實は天理を知らざるに基く者にして俗人の事なり、俗の字を見よ、此れ谷の人なり、天地の大を見ざる狹き量見也、仙人と云ふは山の人也、故に能く宇宙の廣きを知る、釋迦

の如きは大仙なり、故に曰我れ王侯の位を見ること隙を過る塵の如く、金玉を見ること瓦礫の如しと又日蓮や道元の如き北條氏より、數千貫の田園寄附ありしも倶に斥けて受けず道元の如き紫衣を上皇より賜りしも高閣に納めて着けず又德本翁の如き德川二代將軍より病を治せし謝禮として巨額の金米を送られしも辭して受けざりき、孔子の如き水を飲み肱を枕にして道を樂めり」現代政權爭奪の如き誠に人たるの樂を知らざる愚の骨頂と爲す、○老子曰民の能く死するは、其生を求る心の餘りに厚きが故也、故に生を求ること無れは、却て生を得る（意譯）と何が故ぞと云ふに、生を求る心厚ければ、其心一方に偏し中正を失ふて、其智暗きが故也、世の富貴者醫の爲めに殺され、藥の爲めに害せらるゝ者頗る多し、此れ其實證也此の故に只無心にして生を求ること勿れ一齋先生も亦曰養生の道は自然に從ふに在り、養生せんとする心ありても養生に害あり」と又古大醫德人の儒門事親に曰小兒病を治する者は、其貧富貴賤を察して之を治す可し、富貴の家は衣食餘り有が故に、生子常に早死す、貧賤の家は衣食不足の爲めに、生子常に堅し、貧家の子は其慾を縱にするを得ず、故に意の如くならざれば、則ち怒ること多し、怒ること少ければ、則ち肝病少し、富家の子は其慾を縱にするを得る、稍々意の如くならざれば、則ち怒ること多し、怒ること多ければ則ち病多し、又貧家は財無く、藥少きが故に、死少し、富家は財有り、藥多きが故に死

多し、故に貧家の子を育する、富家より薄きも、其小兒の成全は反て富家の右に出づ、抑々子を育するに四方有り、其一は薄衣、淡食、少く慾、寡く怒也、其二に無く財、少く藥其病自癒して、唐醫熱藥の爲めに攻められざること、其三は母の腹中に在て、母が勞働を作し、氣血動用の爲め兒形充實を得る事、其四は母既に勞働を作して生れ易き事也」又俗諺に曰兒の哭は即ち兒の歌なりと、是れ氣の熱を泄す所以にして佳良なり、老子曰終日號とも其聲嗄れずと又余が兒を養ふ法は兒未だ坐せざる時は、赤地に臥せしむ、天寒の時、厚衣を與へず、布して綿せず、能く坐する時に及ては、鐵鈴、木毬等の雜戲物を、細繩にて連ね、水盆に置て、一浮一沉之を弄して聲有らしむ、炎暑の時に當ては、其傍に坐して水を掬し、鈴を弄し、以て諸熱を散ぜしむ、內經に曰四肢は諸陽の本也と、手に寒水を得れば、陰氣、心中に達す、乃ち不藥の藥也、若し小兒の病は庸醫を用ひざるに如かず、妻妾の怪むを恐れば、湯に蒸餅を浸し丸して白丸と作し、欺て眞藥と爲し之を服せしめて、其自然治を爲せ、之を最も上藥と爲す、嗚呼班固は眞の良史なり「病有て治せざれば中醫を得る」と云へり暴に得る大疾病を除くの外、當に謹て陰陽を熟し衆と謀ること無る可し（卒然の大病例へばコレラや食傷中毒疔腫等の外其餘の病は只だ氣血を和し之をして其中正を得せしむ可く、他人に謀る無れとの意也）若し未病の前は余が奉養の法に從へば、病を生ぜず、縱ひ微病有るも、服藥せずして可也」上文小兒病治に就て說くも大人に於ても同一理なり。故に白隱禪師曰「中醫は益なしと雖も害を及さず下醫は無益なり却て害す、招かざるを賢とす。客曰「病有て治せされば常に中醫を得る」との意如何ん

答曰藥は皆毒なり、輕用す可き者にあらず、又中古以來庸醫多し、爲めに害を被る者多し、故に此の語あり。

客曰中醫とは何ぞや

答曰素問に云ふ上醫は病者の九割を派し中醫は其七割を治し下醫は其六割を治すと故に病者で醫藥を用ひされば中醫に掛ると同く七割は自然に癒ゆ。

客曰其醫藥を用ひさる病人の心得如何

答曰上文古大醫歟人の說を守る可し又軒岐救正論に曰心身俱に實する者は時日を經れば自癒す」と雖者其時日を考るに天地の氣は天元紀大論に由るに六十日每に變更するを以て一時的の病は大概此の間に癒ゆ可し但し傷寒感冒は通例十二日間にて快氣に向ふ者也不攝生又は誤治無ければ之を定則とす。

又諸病共養生方は酒色を絕ち、憂愁思慮を止め、飮食を節し過食す可からず、又油物、生冷物諸

果、諸滯滞物を食ふ可からず、又適宜の運動を怠る可からず。

客曰藥毒の說を聞ん。

答曰千金方に曰人體は平和なり、只好く養ふ可し、妄に服藥す可からず、藥は偏味なり（中正の反對）助くる所ある代りに、臟氣をして不平ならしめ、外患を受け易からしむ」又張子和曰藥を以て補と爲さば、甘草、苦參と雖も久服すれば必ず偏勝增氣して、夭する恐れあり、況や有毒藥おや」又扁鵲云和氣を亂る者は病也、病毒を理る者は藥なり、危きを扶くる者は醫也、身を安ずるの本は、必ず食に在り、是の故に食能く邪を排して、臟腑を安じ、神を悅ばし、志を爽にし、血氣を養く、若し能く食を用ひて、病を平げ情を釋き、病を遣る者は良醫也、先づ病源を洞曉し食を以て之を治す可し、共癒へさるに及びて、始て藥を用ゆ、藥性は剛烈なり猶ほ兵の如し、妄に用ゆ可からず」又內經曰大毒藥を用て病を治すれば十に其六は癒す（病の六分癒で藥を止む可し）中毒藥を以て病を治すれば十に七を治す、小毒藥を以て病を治すれば十に八を治す、無毒藥を以て病を治すれば十に九を治す、穀肉果菜の食養を用れば共病根を盡す」と況んや藥治には從治、逆治、正治、反治の法あり、通用、兼用の法あり、病に眞症あり假症あり庸醫の窺ひ知る所にあらず、故曰病有て治せざれば中醫を得ると。

客曰更に醫の說を聞ん。

答曰軒岐救正論醫鑑を見るに明醫有り儒醫有り醫醫、德醫、世醫、流醫、僧醫、名醫、時醫、奸醫淫醫、女醫、瘍醫の十三種あり名醫は黃帝岐伯の如き神醫也」儒醫は大儒にして醫に通る者也」醫醫は良相たる可き手腕ありて朝に居らず世に隱れ居る者也」德醫は救濟を心と爲して功利を計らざる者是れ也」世醫は代々醫を業とし家傳を守る者也」流醫は、共術に粗にして他鄉に流浪し志只食を求むるの類也」僧醫は僧にして醫を鬻ね人を殺し世を禍する者あり名醫は實力無く虛名を揚げ人を害する者也」時醫は書を讀み理を求めずと雖も明敏にして效を立る者也」奸醫は共名の如し」淫醫は房中藥を授け人を淫に導き德を敗るのみならず人命を害す」女醫は共妄治の害多し且つ閨門失節の婦之に由て醫曲甚し瘍醫は外科專門也彼れ共皮毛肌肉を治すれども共皮毛肌肉の本は五臟六腑にして共虛實、病機、寒熱の理に通ぜざるが故に妄治して生を傷ること多し」と此の弊は現代の外科に尤も甚しそは下文に述ふ又耳鼻科眼科齒科等の專門にも前同一の弊あり例へば耳鼻の病因は主として腎臟にあり、眼の病因は主として肝臟にあり、齒の病因は多く腸胃にあり然るに何れも共病因を知らずして共枝葉の標病を醫するが故に根治するを得ざる也

次に外科手術の不成跡を擧れば

一田中氏病理總論曰腺臟の疾患に之を摘除すれば、糖尿病を發生す、甲狀線全部を摘除すれば一種の惡液狀態を來し、全身發育の障碍を來す」又曰一般に結締織及被蓋上皮に屬せざる組織の局所的再生は、官能的意義を有する者に非ず」又曰新生せる小血管の如きは抵抗力弱く容易に破裂出血す」又曰肝の外傷等に瘢痕組織は新生するも、鏡檢すれば膽管の增殖するのみにて、肝細胞は毫も新生することなし」又曰神經の再生は筋よりも更に不完全にして、高等の神經即ち腦脊髓の再生に至りては殆んど之を證明する事能はず、又曰瘢痕內の新生血管は、狹窄潰滅して共數減少す、而て共瘢痕收縮するや、胃腸呼吸道の如き空洞臟器は、之れが爲めに著明の形態變化を來して狹窄す。

一簡明生理學曰神經細胞は再生せず、腺は悉く再生する者に非ず、內臟神經を切斷すれば、共痲痺の爲め、腹腔內の血管擴張し、爲に全身の血液は腹腔內に集り、其部の血管は充血し、他部の貧血を來す、卽ち大動脈及動脈の血壓を測るに、血壓大に低下せり、之に依て腦內にも貧血を起すが故に往々死に陷る者なり。

一山極氏病理總論曰軟骨組織の再生は不十分なり、筋纖維及神經纖維の再生も不十分なり。

一長谷川氏病理通論曰癌腫は切除するも通例再發し、數年間に全身貧血、皮膚汚色、羸瘦脫力等を起し、癌惡液に陷り、死に歸するを常とす。

右の如く外科手術は眞に危險なり何の爲め之を施すや何の爲め病者之を甘受するや實に奇怪也次に內科は如何ん。

一寺田醫學士曰實際藥を用て、癒る病は僅かに急性「リウマチス」「マラリヤ」「チフテリヤ」梅毒位の者で他の病氣に對しては何等の特効藥は無い藥で病氣が癒ると思ふは大間違だ。

一土田博士曰四百四病の病氣中で治療法の分りて居るのは三つか四つしか無い、一寸した鼻風邪でさへ其病源は分つて居らぬ（以上新聞）

一田中氏病理總論曰醫療は一種の方便に過ぎず、疾病其者の治癒は固より自然で醫者は之を補佐するに過ぎずと

吾等は玆に至て四洋醫術の玆だ頼む可からざるを知ると共に又後世の漢方醫の無力を見る左の如し。

一診宗三昧に曰古聖人は只だ一の善政を立つ（蓋し前文黃帝素問の古聖人民を敎へて恬淡虛無ならしめたるを云ふ）後世に至り專ら民の事を增し民をして夭折せしむるの患は藥劑に在り、小疾あれば卽ち醫藥を用ゆ、故に往々生を求めて生を失ふに至る、深く哀む可し、無知の徒は前車の覆

るを悟らず、命を失ふ者相繼ぐ、當世の醫に三種あり、其一は世々醫を業とするを以て、家傳を株守し、學を勉めずして、人を誤る、其二は只だ博覽を努めて、學を棄て、温劑に偏して攻劑を用ひず、其三は、世を欺き名を盜む者にて、口給便佞に藉りて、高貴の人に交り、其勢を假り、車を高ふし術を衒ひ、體を曲げて時に趨り日に無辜の民を殺して、口腹を肥し、妻妾の笑を博す是れ皆地獄の種子也。

一永富獨嘯菴曰人を山野に刼かして、其口腹を養ふ者、之を賊と云ふ、而て其人を殺す生涯に通計するも、百人に過ぎず、然るに方今の拙醫にして流行する者は、知らず識らずの間に、人を害する日に三五人は蓋し少しとせず、生涯なれば其幾千人なるを知らず、其陰惡彼の賊より甚しと

一古大醫、丹溪曰我三十の時に、母の脾瘧を患るに衆醫手を束ぬるに因て、醫に志す、追念するに先子の內傷、伯考の目疾、叔考の腿痛、室人の積痰皆な誤藥に殺す」と古來庸醫の多き推知す可し。

客曰足下醫學者にして醫藥を非とするは何ぞや答曰世人醫藥に迷ふて生命を失ふ者多きが爲め也

客曰然らば之を救ふこと如何。

答曰最善の方は　皇訓本義を讀み並に上文述ふる所を會得して心を治むるに在り」其次は病有て治せずして中醫を得るに在り」其次は一通り醫藥の道に通ずるに在り。

客曰異なる哉言也醫藥を非としつゝ醫藥を學べと云ふこと如何ん。

答曰人悉く心を治めて病源を除き得可きにあらず、」又悉く病を治せずして中醫を得る能はず」何となれば人には賢不肖ありて其智等しからず殊に老少婦女の之を爲すに堪へざるあり又況んや上文儒門事親に云へる如く暴に得し大病の除例外も之れあるおや。

客曰一通り醫藥の道に通ずる利益如何。

答曰先づ古人の說を擧げん。

一大醫張仲景が「當世の士、心を醫事に留めて其身を長養する能はず、只だ名利を競ふて其末を飾り其本を棄て其外を華にして其內を悴し凡醫の手に斃る」と呵せしは既に上文に記せり。

一玄晏先生曰人醫事を知らざるは所謂遊魂のみ、君父の病、赤子の疾何を以て之を濟はん、此れ聖賢の精思して其理を盡さんと欲する所也。

一藏人が儒門事親と云ふ醫書を著はせしも此の聖賢の道に由る也。

一明道先生曰子の親に事へる、醫を學ぶを大事とす、今の人父母の疾を醫者に一任するは、事に害あり、必ず醫藥の道理を識て、病の如何ん、藥如何を、識別し又醫者の力を試るを要す。

一伊川先生曰治病を庸醫に委す此れ不孝不慈也と又筆者見る所之に止らず、以爲らく醫道を知らざれば天下國家を治るを得ず、何となれば心身を治ると天下國家を治ると全く同一なること　皇訓本義に詳論せし如くなれば也其要を擧れば中道不偏の一語に盡く、又醫道を知らされば無病長壽は期す可からず同じ器物を保つにしても粗略に之を使用すれば子孫に傳へて家の重器となる、彼の庖丁が牛を解くが如き十九年間に數千牛を屠割して其刀猶ほ新なりしと云ふにあらずや況んや、其病源たる慾を制するに於て、眞に慾の懼る可きを知て之を制する者と、之を知らずして制する者と、其効大に異なるおや、之を火災に譬へて言ふならば平生火の用心もせず、火の消し方も知らずして、消防組に一任して、顧みざるが如き、消防組の馳付けたる時は過半燒失せし時と思ふ可し、凡そ病は其初めに早治すれば衣の塵を拂ふ如く容易に去る者を、醫學を知らざるが爲めに再三するから、取り返しの付かぬ大病と成る也、不肖七十九年の實驗是の如し、且つ醫藥の道を一通り知り居れば、醫療の出財を免れ得て、生活容易なりと知る可し。

結論

皇訓、養性ともに歸着する所は中の一字である之を不偏不黨と謂ひ執中と謂ひ中庸と謂ひ至善と謂ひ太極と謂ひ良知良能と謂ひ至誠と謂ひ人性と謂ふ。

養性本義　終

昭和八年五月十五日印刷
昭和八年五月十八日發行

皇訓本義養性本義合卷　定價金貳拾錢稅共

著者兼發行者　神奈川縣腰越町字津　岸原鴻太郎　七十九歳
振替東京參參貳參番

印刷者　東京市小石川區小日向水道町二〇　香山賢卿

印刷所　東京市小石川區小日向水道町二〇　香蘭社

終